◎特集：学ぶ意欲をどのように高めるのか ― 教養ゼミナール（農芸）の挑戦

教養ゼミナール（農芸）のねらいと展望

白杉 悦雄 | Etsuo SHIRASUGI

1.「教養ゼミナール」導入の背景と経緯

教養ゼミナールは、2005年度前期から本学で実施された、新入生を対象とする初年次教育科目である。導入の背景には、大学大衆化時代における学生の多様化があり、その課題に対して本学においても速やかに対応する必要があるとの認識があった。また、たとえ本学のような芸術デザイン系大学であっても、4年後の出口で、作家やデザイナー、起業家を目指す学生は30%以下である。したがって、70%以上の学生に対しては、社会が求める一般的な能力を身につけさせる教育義務がある。こうした学生の多様化や進路問題など、高等教育を取り巻く状況は、現在も変わらないばかりか、むしろ厳しさを増している。

導入当時に設定した教養ゼミナールの目的は、「コミュニケーション（力の向上）」「基礎的学修スキルの習得」「自ら学ぶ学習態度の習得」「日本語表現力の向上」の4つである。これらは、2005年当時における、大学に対する社会的要請（企業が大学卒業生に求める能力）と学生のニーズに基づいて設定したものであり、特に芸術系大学を意識してのものではなかった。しかし、現在、これらはいずれも「社会人基礎力」（経済産業省）、「就職基礎能力」（厚生労働省）、「学士力」（中央教育審議会）などとして、学生が卒業時に身につけるべき力と規定され、大学にはそのための教育の質保証が求められるに至っている。

教養ゼミナールは、2005年度の開設当初は、選択科目であり、1クラス15名定員で7クラスからスタートした。履修率は全1年生の約20%である。しかし、2007年度から、「教養ゼミナール履修の手引（講義要項）」を作成し、事前周知を図った結果、選択科目であるにもかかわらず、履修率が向上して全1年生の60%を超え、2008年度には90%を超えた。その結果をうけて、2009年度から教養ゼミナールを必修化することにした。しかし、そこからまた新たな課題が発生する。（以上、［図表1］参照）

大学に入学してくる学生の「多様化」がいわれて久しい。「多様化」しているのは、大学入学時の学力であり、実態は、大学全入時代における学力の全般的「低下」である。「多様化＝学力低下」問題の厄介な点は、それが「学ぶ意欲」の低下と結びついていることである。

教養ゼミナールを必修化したうえで、初期に設定した目的を達成するためには、「学生＝学力の多様化」問題を並行して解決していかなければならない。

初年次教育の目的を、導入時の「コミュニケーション（力の向上）」「基礎的学修スキルの習得」「自ら学ぶ学習態度の習得」「日本語表現力の向上」から、当面する課題に向けて方向転換する必要が出てきた。まず、「学ぶ意欲」の喚起が必要だからである。そこで、教養教育センターでは、初年次教育の目的を、「身体性、意欲、自主性、社会性の4つの力を自らの内から喚起し、体得する」と再定義し、教養ゼミナールを再編することで、2011年度からこの課題の対応することにした。

2.「農芸クラス」の導入とその難点

教養ゼミナール「農芸クラス」とは、農業を教養の授業として行い、単位を与えるクラスである。

2010年度から、教養ゼミナール全54クラスのなかに農芸クラス10クラスを正式に開講した。それ以前にも、紅花や

藍草を種から育てているクラス、水田からエコを考えるクラスなどが教養ゼミナールのなかにあったが、統一的な教育目的のもとに開講されていたわけではない。

この時期に、なぜ、農芸クラスを導入したのか。その端緒は、本学の設立の理念にまでさかのぼる。本学の「大学設立の宣言」（徳山詳直 1992）に、以下の一文が含まれている。

目前に迫った新しい世紀は、戦争と平和、南北問題、更には体制崩壊の問題を基軸とする新しい世界調和への展望、そして何よりも、この母なる大地―地球―をいかにして守るか、これら人類生存条件の解決こそ最大の課題ではなかろうか。

「この母なる大地―地球―をいかにして守るか」、この課題をどうすれば学生たちに伝えられるか。そのためには、自然に対する畏敬の念を呼び覚ますしかない。自分たちもまた自然の一部であることを思い出させるしかない。それが、徳山理事長の出した答えであった。

理事長からの指示は、畑を用意したから、学生とともに土を耕しながら、理念と課題を語れ、というものであった。そこから授業化への模索が始まった。

農芸クラスは、大きな不安と課題を抱えてスタートした。大きな不安とは、担当教員のほとんどが農業経験者ではないことである。自分たちが農業を授業としてやれるのだろうか、全く未知への挑戦であった。また、新入生が履修を希望してくれるかどうかも心配だった。希望者が少なかったら、どうしようか。新入生は芸術やデザインを学びたくて入学してくるのだから、農業などには関心を持たないのではないか。これも当然すぎる心配の種である。しかし、幸いに、後者については、程よい人数の希望者があり、心配は杞憂に終わった。

問題のほうも、なかなかの難題であった。それは、「芸術デザインを学ぶ大学で、土を耕し、農業を行うことにどんな意味があるのか」、「農業を正課科目として開設する意義や必要性があるのか」など、想定される問いに対して、あらかじめ回答を用意しておかなければならないことである。案の定、その後、理事会に呼び出されて説明を求められることになった。また、新聞社の取材でも必要性や意義について答えるはめになった。

そこで、あらかじめ、「なぜいま東北芸術工科大学は『土を耕す』のか」という問いを立てて、これに正面から答える宣言文を起草することにした。それが［資料1］に付した文章である。そこに書いた「人間の生の実感、生きている自然の一部であるという実感を得ながら学び、生きていくための真の教養……を確立する」、「かつて日本人がもっていた自然に対する繊細な感受性」を取り戻す、などは授業のテーマとして、シラバスにも記載した。

また、宣言文「なぜいま……」に基づいて、「ライブラリー通信」（2010.autumn 東北芸術工科大学図書館）に、つぎのように書いて、全学の学生や教職員に周知し、理解を求めることにも努めた。

ところで、芸工大は芸術デザインを学ぶ大学です。その大学で、なぜいま「土を耕す」のか。「土を耕す」ことと芸術デザインの間にどのような接点があるのか。

私たちは、農芸クラスの意義をつぎのように考えています。芸工大が「土を耕す」のは、自然に学び、生命自然に対する畏敬の念を芸術家魂に刻み込み、そこから芸術活動と芸術デザイン教育を実践していくためである、と。

では、なぜ「自然に学ぶ」ところから始めるのか。それは、私たちが生きている実感、人間が生きている自然の一部であるという実感を持てなくなっているという現実があり、それがさまざまな悲劇の原因になっていると考えるからです。

人を含めた地球上の生物は、単独では生きていません。すべてはつながりのなかで生きています。私たちが生きているということは、万物とともに生きているということなのです。東アジアの伝統思想において考えられていた自然の世界は、人をも含む万物がその中で連続しあい一体をなす世界でした。その考え方は、万物の中に神や仏をみてきたわれわれ日本人の心のひだにも潜んでいるはずです。

しかし、幼い時からあるがままの自然に触れることなく、人工物に取り囲まれて育つことで、かつて日本人がもっていた自然に対する繊細な感受性が失われつつあります。自然から遠く離れた結果、先進国の人間は傲慢になり、自分たちもその一部である自然を破壊してきました。その結果、多数の生物を絶滅させ、発展途上国の人々を犠

牲にし、人類全体の未来さえ危うくさせています。

芸工大は、生命自然に対する畏敬の念と、自分たちも自然の一部なのだというところから芸術デザイン教育を始めたいと考えているのです。まだ、小さな一歩を踏み出したばかりですが、この種を大きく育てて、想像力と創造力の花を咲かせたいと願っています。（白杉 2010）

3.「農芸クラス」のねらい

農芸クラス開設の根底には、本学の学生における自然体験の不足と、生きている実感、人間が生きている自然の一部であるという実感の喪失、という現状認識がある。芸術デザインを学ぶ学生に必要な「身体性と感性の回復」が農芸クラスの目的である。

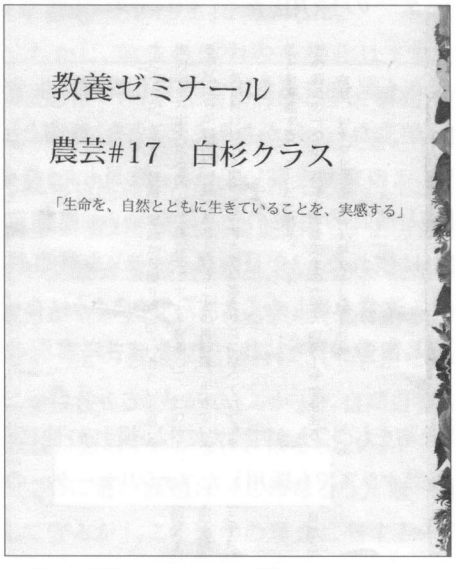
農芸クラスのねらいは、つぎのようにまとめることができる。

本学が掲げる教育目的「人と自然を思いやる想像力と、社会を変革する創造力を身につけ、未来を生きるための希望をもった人材の育成」のもとに、「土を耕し、生命を育てる」ことを通して、自然を五感で感じ、自分が生きていること、自分が自然の一部であり、他の生命とつながりあっていることを実感する。そうした生命自然の実感を基盤にしながら、自己や芸術デザインについて考え、考えながら土を耕して自然と対話し、思考を深め、自己を確立していく、と。

2010年度に農芸クラスを実際に運営した経験によって、教養教育における「身体知」の重要性が改めて認識された。その年の後期に、2011年度から導入するワークショップ・クラスを設計するにあたって、教養教育の内容や方法も同時に見直しを行った。その結果、「言語や書物を通しての知的訓練を中心とする教養とともに、身体知としての教養の重視」と、「身体知の言語化」という方向性が打ち出された。

まず身体とこころ、五感を総動員して実感する。そして振り返りと気づきによって体験を概念化する。つまり、ワークショップの基本ステップであるが、これは農芸クラスにもそのまま適用できると考えた。

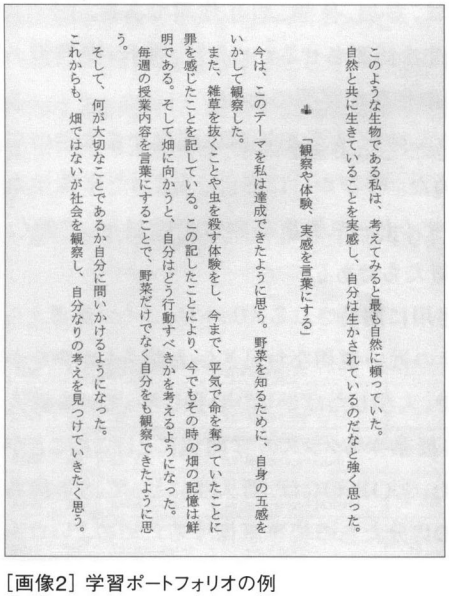
「身体知を言語化する」ための具体的なツールとして、教養ゼミナールの農芸とワークショップのすべてのクラスに、その日の体験を言葉にする「自己評価シート」と学期末に自分の学習活動を振り返る「学習ポートフォリオ」を導入することにした。体験したことや感覚したことを言葉にし、それを繰り返すことで、体験や観察の質が深化する。そして、なによりも重要なことは、何が必要か、何が自分に足りないのかを、自分で気づくことができることである。


教養ゼミナール

農芸#17　白杉クラス

「生命を、自然とともに生きていることを、実感する」

［画像1］学習ポートフォリオの例


このような生物である私は、考えてみると最も自然に頼っていた。
自然と共に生きていることを実感し、自分は生かされているのだなと強く思った。

「観察や体験、実感を言葉にする」

今は、このテーマを私は達成できたように思う。野菜を知るために、自身の五感をいかして観察した。
また、雑草を抜くことや虫を殺す体験をし、今まで、平気で命を奪っていたことに罪を感じたことを記している。この記したことにより、今でもその時の畑の記憶は鮮明である。そして畑に向かうと、自分はどう行動すべきかを考えるようになった。
毎週の授業内容を言葉にすることで、野菜だけでなく自分をも観察できたように思う。
そして、何が大切なことであるか自分に問いかけるようになった。
これからも、畑ではないが社会を観察し、自分なりの考えを見つけていきたく思う。

［画像2］学習ポートフォリオの例

2011年度と2012年度の農芸クラスを運営し終えて、農芸クラスの教育的な「ねらい」は、「生命を、自然と共に生きていることを、実感する」、「観察や体験や実感を言葉にする」、この二つに集約してきたと考える。そして、この「ねらい」が達成できれば、「農芸」は芸術デザイン大学の教養教育科目として成立しうる、という手ごたえも感じられるようになった。

4. ファシリテーターの採用

2012年秋、今年も気候に恵まれて野菜も順調に生育し収穫の喜びを、学生たちと分かちあえたことを、感謝とともに回想しながら、この文章を書いている。教員もようやく季節の移り変わりと植物の生育の速さに馴染み、農作業の手順にもすこしは慣れた。3年目の農芸クラスを無事終えてみれば、クラス運営を楽しむことすらできるようになった。1年目の不安と苦労の日々に比べれば、まさに雲泥の差である。

クラス運営に余裕をもつことができたのは、慣れの他に、2012年度から農芸クラスでも採用したファシリテーターの存在が大きかった。

ファシリテーターは、2011年度の教養ゼミナール・ワークショップ・クラスではじめて導入したものである。ワークショップのキーワードは、参加、体験、相互作用である。1クラス30名前後の学生を活動させるためには、進行・促進役のファシリテーターの存在が重要である。

私たちはその人材を、大学の近隣に在住する本学の卒業生の中に求めた。呼びかけに応じて集まった卒業生たちは、地元でデザイナーや美術の非常勤教員として働く、30歳前後の若者たちである。

OB・OGの起用に期待されるメリットは、いくつか考えられる。まず、①年の近い親切なお兄さん・お姉さんが声をかけてくれることで、入学したばかりの緊張しきっている新入生は、第一週の授業からクラスの雰囲気にとけこむことが容易になる。また、②OB・OGは、新入生にとって、5年後あるいは10年後の自分たちの姿を想像するためのよいロールモデルでもある。OB・OGのファシリテーターたちも、自分たちが新入生だったころのことを思い出し、進んで的確な授業支援を行うことができる。事実、2011年度前期の授業を終わってみれば、彼（女）らがとてもよい仕事をしたことがわかった。

そして、③担当教員にとっても、このチーム・ティーチングには大きなメリットがある。新規の授業科目を立ち上げて運営することは、実は、たいへんなエネルギーを必要とする。特に最初の年は、学生からどんな反応が返ってくるか、見当もつかない。ところが、ファシリテーターと一緒にプログラムや運営を相談していくことで、この不安は、かなり解消される。学生に年齢の近いファシリテーターの意見を聞くことで、学生の反応を先取りできるからである。

ワークショップ・クラスにおけるファシリテーターの成功をみて、農芸クラスでもその活用の可能性が検討され、候補者探しを行った。しかし、前年度のワークショップ・クラスのときのようにはいかなかった。農作業の経験者という条件が私たちの念頭にあったからである。

結局、2012年度は、農芸8クラスに対して3名のファシリテーターしか確保できなかった。だが、彼（女）らの活躍は期待以上であった。

ファシリテーター効果は、第1週目から見てとることができた。学生たちの緊張がほぐれたからである。また、彼（女）らはさまざまなアイディアを提供してくれた。例えば、学生が毎週提出する「自己評価シート」を編集して、「アナログtwitter」として、翌週、学生にフィードバックしてくれた。これは、クラスの学生の相互理解を深めるうえで、とてもよいツールとなった。

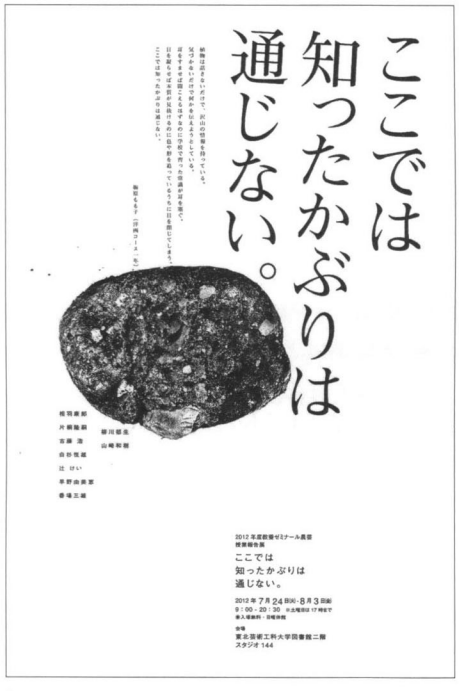
2012年度前期の終わりに、図書館2階の「スタジオ144」で農芸授業報告展「ここでは知ったかぶりは通じない。」を開催した。

展示会のタイトルは、洋画コース一年の学生がある週の「自己評価シート」に書いた下記の文章から採用したものである。

植物は話さないだけで沢山の情報を持っている。
気づかないだけで何かを伝えようとしている。
耳をすませば聞こえるはずなのに学校で習った常識が耳を塞ぐ。

目を凝らせば本質が見抜けるのに色や形を追っているうちに目を閉じてしまう。
ここでは知ったかぶりは通じない。

この文章に反応してタイトルに採用したのはファシリテーターである。また、展示会自体も、企画し、準備し、設営したのはファシリテーターである。展示会に対する学生や教員の反応と評価も満足できるものであった。



[画像3] 農芸クラス報告展のポスター

5. 農芸クラスの課題と展望

農芸クラスの定員は8クラスで約200名、これに対して2012年度の履修希望者は約300名であった。開設当初の「もし希望者が少なかったら」という不安は解消されたが、一方で、履修登録から漏れた学生の不満は残ることになる。利用できる畑に制約があるとはいえ、今後の課題である。

また、教養教育の正課科目として、「その学修成果は何か」が常に問われるだろう。宣言文を起草することによって、大所高所から一応の回答はしている。しかし、本学の「育成すべき人材像」と「身につけるべき力と能力要素」に鑑みて、農芸クラスは何を「授業の到達目標」としているのかが、改めて問われよう。

これについては、「ねらい」のところで、「生命を実感し、自然と共に生きていることを実感する」、「観察や体験や実感を言葉にする」といい、これが達成できれば、「農芸」は芸術デザイン大学の教養教育科目として成立しうる(であろう)、と述べておいた。また、そのための授業ツールとして「自己評価シート」と学期末に自分の学習活動を振り返る「学習ポートフォリオ」を導入した。

しかし、学生の学力の多様化はますます進行している。加えて、日本社会における学歴構造や若者の労働市場が変化しており、大学を卒業したというだけでは、必ずしも就職には繋がらない時代である。「社会人基礎力」(経済産業省)、「就職基礎能力」(厚生労働省)、「学士力」(中央教育審議会)など、学生が卒業時に身につけるべき力がやかましくいわれる訳はそこにある。大学は、開講するすべての授業科目において、「学生にどのような力を身につけさせることができるか」を、自問自答して絶えず授業改善に努めていかなければならない。

さらに重い課題は、「この母なる大地—地球—をいかにして守るか」、この建学の理念に発するメッセージを、学生にうまく伝えられているだろうか、ということである。単なる農業の授業ではなく、理念を伝える科目として、まだまだ授業内容を整備していかなければならない。

さらに、初年次教育科目として、学生の意欲と自主性を喚起すると同時に、授業の到達目標を明確にして、教養教育カリキュラムが担うべき役割を果たしていかなければならない。

農芸クラスの挑戦は、始まったばかりである。

西暦	平成	クラス数	担当教員数(人)	FA(人)	履修率(%)	備考
2005	17	7	7(教2,芸3,デ2)		20	選択科目
2006	18	15	13(教5,芸3,デ5)		32	選択科目
2007	19	27	25(教6,芸8,デ8,C3)		63	選択科目
2008	20	35	33(教6,芸11,デ11,C5)		92	選択科目
2009	21	50	42(教11,芸12,デ16,C3)		100	全学必修
2010	22	54(農10+44)	40(教11,芸12,デ15,C2)		100	全学必修
2011	23	20(農10+ws10)	16(教4,芸6,デ5,C1)	10	100	全学必修
2012	24	22(農8+ws14)	17(教6,芸8,デ3)	16	100	全学必修

[図表1] 教養ゼミナールの歩み

［資料1］なぜいま東北芸術工科大学は「土を耕す」のか

なぜいま東北芸術工科大学は「土を耕す」のか。
自然との対話を通して、自然の摂理を知り、人間中心主義の驕りから覚醒するためである。

三八億年前に生まれた生命体―おそらくたった一個の細胞―を出発点に、多様な進化をとげて、いま三千万種を超える生物が緑の地球に棲息する。その多様な生物種の一種でしかない人類が誕生したのは、わずか数百万年前のことにすぎない。

人を含めた地球上の生物は、単独では生きていない。すべてはつながりのなかで生きている。私たちが生きているということは、万物とともに生きているということであり、共に生かされて生きているということである。

自然に包まれて、万物と共生してきたその人類が、いま、かつてない環境破壊を引き起こし、毎日一〇〇種の生物を絶滅させている。

二〇一〇年現在、世界人口は推定六九億人、そのうちの六人に一人が飢餓状態にある。

殺戮と貧困と環境破壊という、人類が直面している危機の根底には、人間精神の惨状が横たわっている。人間こそが世界の中心であり、万物の頂点にあると考えたときから、歯止めのない快楽と欲望の踏み車を回し続ける人間精神の荒廃がはじまった。

近代科学技術文明を強力に推し進める主要路線を形成したのは、一七世紀、西洋の「機械論的自然観」である。この自然観は、近代文明の形成に大きく寄与したが、しかし同時に、自然から生命を奪い、人間が自然の一部であることを忘れさせてしまった。
すべての危機は、人間が自然の一部であることを忘れ、自然をもっぱら征服すべき対象、支配の対象としてしか見なかった近代の、人間中心主義の驕りが招いたものである。

なぜいま東北芸術工科大学は「土を耕す」のか。
人間の生の実感、生きている自然の一部であるという実感を得ながら学び、生きていくための真の教養、新しい世界観を確立するためである。

自然から遠く離れた結果、日本をはじめ先進国の人間は傲慢になり、自分たちもその一部である自然を破壊してきた。その結果、多数の動植物を絶滅させ、発展途上国の人々を犠牲にし、人類全体の未来さえ危うくさせている。

東アジアの伝統思想において考えられていた自然の世界は、人をも含む万物がその中で連続しあい一体をなす世界であった。その考え方は、万物の中に神や仏をみてきた民族の末裔である、われわれ日本人の心のひだにも潜んでいるはずである。

しかし、幼い時からあるがままの自然に触れることなく、人工物に取り囲まれて育つことで、かつて日本人がもっていた自然に対する繊細な感受性が失われつつある。

傲慢になりすぎた人間を謙虚にし、思索的にしてくれるものは、自然をおいて他にない。自分たちもまた全体の一部であることを思い出させ、畏敬の念を呼び覚ましてくれるのも、自然である。

なぜいま東北芸術工科大学は「土を耕す」のか。
ソウゾウの種を植えて、ソウゾウ力を育てるためである。

東北芸術工科大学は、「芸術には社会が抱える問題を解決し社会を変革する力がある」という信念のもとに、「想像力と創造力を身につけ、未来を生きる人材を育成する」という教育目標を定めている。そして、身につけるべき力の一つを「人と社会への積極的協調・実践」と定義する。そのために本学はこれまでにも芸術活動を地域へ、東北へ、日本全体へと広げることに努めてきた。

しかしながら、人間社会の外側には、「ありとあらゆるものの全体」としての自然が存在していることを忘れていなかっただろうか。自然を顧慮しない、自然に根をおろさない芸術活動に、社会を変革する力がある、といえるだろうか。

東北芸術工科大学が「土を耕す」のは、「自然に学び」、「生命自然に対する畏敬の念」を芸術家魂に刻み込み、そこからわれわれの芸術活動と芸術デザイン教育を実践していくためである。

2010年4月1日

東北芸術工科大学
理事長　徳山 詳直　監修
教養教育センター長　白杉 悦雄　記

［執筆者］
白杉 悦雄
Etsuo SHIRASUGI
教養教育センター
Center for Liberal Arts
教授
Professor